

現代日本語の文学作品における受身文の研究

—韓国語との対応関係分析を中心として—

A Study of Current Japanese Passive Sentences;
using Contrastive Analysis with Korean

千 英子 柏原 卓

Youngja CHEON Suguru KASHIWABARA

2005年10月6日受理

Summary

We investigated the Korean translations of the four Japanese novels in order to find out how they translated the Japanese passive sentences into Korean. The results are as follows:

1. The Japanese 563 (100%) passive sentences are translated into 299 (52.6%) passive sentences, 213 (37.5%) active sentences, and 56 (9.9%) other sentences.
2. When we examine the Japanese passive sentences translated into active in Korean, we find that 208 sentences contain transitive verbs and 5 sentences contain intransitive verbs. Percentage of transitive verb sentences is 36.9 (208/563) % and intransitive verb sentences is 100 (5/5) 5%.
3. In the case of indirect passive sentences in Japanese, they frequently correspond to active sentences in Korean. In the case of Japanese direct passive sentences, they correspond to Korean active sentences when they have animate subjects.

Based on the above results, we conclude the following: The reason why Korean has more active sentences than Japanese is not that Korean has more constraints on the passive sentences, but that they use different viewpoints when they describe events. In Japanese they take the viewpoint of the subject and focus on the result of the action. In addition to that, they make the subject in the subordinate clause agree to the subject in the main clause. They use more passive voice in Japanese. In contrast to that, Korean takes the viewpoint of the agent in the event, and describes the event directly. This makes Koreans use more active sentences than Japanese people.

1. はじめに

韓国人の日本語学習者は中・上級になっても「妻に逃げられた」ではなく、「妻が逃げた」のような日本人から見れば不自然な表現をよくする。それは日本語の受身文「妻に逃げられた」に対して被動文で対応せず¹⁾、「妻が逃げた」という能動文で対応する韓国語の干渉を受けているからである。日本語における受身文は日本語学習者にとって、習得が難しく誤用が問題となり、受身文を使うことを思いつかぬまま、不適切な発話におちいることが多いのである。

日本語と韓国語における受身文の対照研究は李(1979)、梅田(1982)、生越(1982)、尹(1998)、塚本(1993)などで見られるように、その形態・構文・意味・動詞に関する制約など様々な角度から研究されており、両言語の類似点と相違点は数多く指摘されているが、主に文法的な特徴に焦点が置かれている。ところが、日本語学習者が日本語の受身文の特徴を十分に把握し、適切な場面で適切な受身文が使

えるようにするためには、受身文が使われている実際の文脈や状況の中から理解することが非常に重要である。

そこで、本稿では日本語の文学作品を対象とし、実際に使われている大量の例文に基づいて、日本語の受身文がどのように韓国語に訳されるかを調査する。その中で日本語では受身文で表す表現が、韓国語では能動文で表わす表現となる事例だけを取り上げて、具体的に分析を行うことにする。分析の方法としては、まず受身文における述語動詞の性質と構文別に両言語の対応状況を考察する。さらになぜ日本語の受身文に対して、韓国語では被動文で対応せず、能動文で対応するのか、その根本的な要因を分析し、被動文が成立しない韓国語の能動文の特徴を探ってみる。この試みは両言語における受身文の特徴をより明らかに把握し、日本語の受身文の学習ばかりではなく、日本における韓国語の教育現場でも役立つものと期待される。

2. 問題提起

- a 彼は 警察に 捕まえられた。
 a' 그는 경찰한테 붙잡혔다. ——被動文
- b 突然 友人に 声を かけられて びっくりした。
 b' 갑자기 친구가 말을 걸어서 놀랐다. ——能動文
- c 太郎が 次郎に 殴られる。
 c' 타로가 지로한테 맞다. ——能動文
- d 彼は 幼いとき 母に 死なれた。
 d' 그는 어릴때 어머니를 여의었다. ——能動文

上の例文の中で、aに対してa'は被動文で対応している。一方、bcdの受身文に対して、b'c'd'は同じ出来事を表しているのにも拘わらず、ともに被動文で対応せず、能動文で対応している。つまり、bに対して「突然友人が声をかけて、びっくりした。」のように一つの文章の中で異なる主語を立てて能動文で表現されている。一方、cに対して、韓国語では「때리다/殴る」の被動形は存在せず、「맞다/殴られる」意味を表す能動動詞が用いられている。またdのように、日本語は「母に死なれた」の自動詞にも受身文が成り立つが、韓国語では自動詞には被動文が成立しないため能動文で対応している。

ところで、韓国語における被動文は日本語と比べて、多様な形態で表わされるのが特徴である。韓国語の被動文を分類する場合は、形態的特徴が基準になることが多い。一般的に被動文として認められる形態は²⁾、次の3つである。

- i 類被動文—被動の接尾辞「이 (i)、히 (hi)、리 (ri)、기 (ki)」の接続による被動文
 ii 類被動文—被動の助動詞「아/어지다 (a/eo jida)」の接続による被動文

3. 文学作品に見られる対応状況

本調査で日本語の文学作品における受身文は568文だが、そのまま韓国語の被動文に訳された文は52.6%の299文にすぎない。その残りの47.4%の中、37.5%の213文は能動文形式で表現されて、9.9%の56文はその他の形式で表現されている。本節では、日本語の受身文における述語動詞の性質と構文の分類に注目して、日本語の受身文に対して韓国語の能動文で対応する実例を作品別に、その使用状況を考察することにする。まず日本語の受身文の述語動詞の性質を基準に調査した全体的な対応状況を見ると、作品によって分布が偏っているが、全体的な傾向としては表

iii類被動文—被動の意味を表す動詞「되다 (doeda)、받다(badda)、당하다(danghada)」の接続による被動文

i 類被動文は成立する動詞に制約が多く、韓国語の固有語動詞の中で接尾辞が接続できる動詞は限られている。i 類被動文が成立しない固有語動詞は被動の助動詞「아/어지다 (a/eo jida)」によって被動の意味が表され、漢語動詞の場合は被動の意味を表す動詞「되다 (doeda)、받다(badda)、당하다(danghada)」によって被動文を作ることができる。

韓国語は日本語と語彙、語順、文法などの様々な面で類似しており、多様な被動形態を持っているのにも拘わらず、日本語の受身文に対応せず、能動文で対応する場合が多いが、その要因を把握することは非常に重要である。したがって、本稿では日本語で受身文で表す表現が韓国語で能動文で表す表現となる実例について、具体的に検討・分析を行うことによって、日本語の受身文の特徴をより明確に認識することを目的とする。

1のようにまとめることができる。以下では、「例文典」中の①を「雪国」、②を「キッ」、③を「ノル」、④を「妻よ」と記す。

3.1 受身文の述語動詞別の対応状況

表1のように、韓国語の能動文と対応する全体の受身文の中で、他動詞の受身文は208文で非常に高い利用率を示している。一方、自動詞の受身文はわずか5文しかないが、本調査で選ばれた作品の分布が偏っている可能性もあり得るが、自動詞の受身文は日本語においても、実際の言語場面ではその使用が限られていると言える。韓国語の能動文との対応状況をみると、他動詞の受身文は平均的に38.5%の

割合で対応する。例えば「雪国」の場合、日本語における他動詞の受身文127文の中で40.1%を占める受身文が韓国語の被動文で対応せず、能動文で対応している。反面、日本語の自動詞の受身文は100%韓国語の被動文に対応しないが、これは当然の結果

である。それは韓国語には自動詞による被動文が存在しないためである。以上述語動詞の性質別の対応状況について考察してみたが、次は日本語の受身文の構文別の対応状況を調べてみることにする。

表1 受身文の述語動詞別対応頻度

		雪国	ノル	キッ	妻よ
他動詞	J他動詞の総受身文数	127	297	77	62
	K能動文の対応文数	51	103	25	29
	K能動文の対応頻度	40.1%	34.7%	32.5%	46.8%
自動詞	J自動詞の総受身文数	3	2	0	0
	K能動文の対応文数	3	2		
	K能動文の対応頻度	100%	100%		

*日本語をJと、韓国語をKと表記する。(以下同様)

3.2 受身文の構文別の対応状況

日本語の受身文は様々な名前前で分類され、学者ごとに若干の相違はあるものの、構文的特徴と意味的特徴によって大きく「直接受身」と「間接受身」に分けることがほぼ同一の見解である³⁾。直接受身文において主語が感情をもつ有情物であるか、或いは感情をもたない非情物であるかは、受身文の意味に深く関わるものである。したがって本調査では「直

接受身文」を「有情物受身文」と「非情物受身文」に下位分類する。「間接受身文」の主語は基本的に有情物である。表2は日本語の受身文が韓国語の能動文に訳される場合、使用頻度を構文別にまとめたものである。上段は受身文の構文別に対応する韓国語の能動文数で、下段は同じ作品の中で占める割合である。

表2 受身文の構文別対応頻度

		雪国	ノル	キッ	妻よ
直接受身文	有情物受身文	18 (33.3%)	65 (61.9%)	16 (64%)	14 (48.3%)
	非情物受身文	15 (27.8%)	18 (17.1%)	6 (24%)	10 (34.5%)
間接受身文		21 (38.9%)	22 (21%)	3 (12%)	5 (17.2%)

表2から分かるように全ての作品において、有情物受身文が非情物受身文より高い対応頻度を示している。言い換えれば主語が有情物より非情物のときに日本語の受身文は韓国語の被動文と対応する可能性が高い。それは韓国語においても非情物被動文はよく使われているためである。本調査における受身文構文別の全体的な対応状況を表3のようにまとめる

ことができる。表3から分かるように間接受身文の約5割が韓国語の能動文に訳される。つまり、直接受身文より間接受身文のとき、韓国語の被動文と対応するのが難しいことを示している。また直接受身文の中では有情物受身文と非情物受身文における対応頻度は39.5%、28%で、有情物受身文の場合韓国語の能動文と対応する割合が高い傾向を見せている。

表3 全体の構文別の対応頻度

受身文の分類		J 総受身文数	K 総能動文数
直接受身文	有情物受身文	286	113(39.5%)
	非情物受身文	175	49(28%)
間接受身文		107	51(47.7%)

以上、日本語の文学作品が韓国語に訳される際、日本語の受身文における述語動詞の性質と構文の分類に注目して、日本語の受身文が韓国語の能動文と

対応する実態を作品別に、その使用状況を考察してみた。

4. 分析と結果

本節では作品の実例に基づいて、なぜ日本語の受身文に対して韓国語は能動文で対応するか、さらに韓国語の被動文が成立しない場合ないし被動文の成立制約、視点の置き方、述語動詞と構文の特徴に注目して詳しく分析を行う。

4.1 Jにおいて、意思・思考・言語伝達を表わす場合

- (1) ある日私の担当医にその話しを言うと、君の感じていることはある意味では正しいのだと 言われました。 「ノルウェイの森」
어느 날 담당 의사에게 그 말을 했더니, 내가 느끼고 있는 것은 어느 의미에서는 옳다고 하더군요. 「상실의 시대」
- (2) 駒子は島村に 問われる ままに、「雪国」
고마코는 시마무라가 묻는 대로, 「설국」
- (3) 何か 寄付があるたびに親にぶつぶつ 文句を 言われて、 「ノルウェイの森」
무슨 기부가 있을 때마다 부모님은 투덜투덜 불평을 하고, 「상실의 시대」

これらの例文で使われている「言われる」「問われる」「文句を言われる」の本動詞「言う」「問う」は常に対象を必要とする他動詞で、言語伝達を表わす典型的な他動詞である。しかし、韓国語の接尾辞による被動文の成立制約には⁴⁾、하다系動詞、内的な経験を表わす自覚動詞(感じる느끼다等)、対称を表わす動詞(会う만나다等)、ㄷ系末音動詞の一部(問う묻다等)は、被動文が作れないとされている。以上の韓国語における被動文の意味論的・音韻論的制約から、「言われる」「問われる」「思われる」のような意思・思考・言語伝達に関わる述語動詞による受身文は、韓国語に訳される際、能動文で表現される傾向が見られる。一方、韓国語においても「感じられる」「思われる」に対応して被動の助動詞による「느껴지다/感じられる」と被動の意味を表す動詞による「생각되다/思われる」という表現も可能で、訳者によっては「느껴지다/感じられる」「생각되다/思われる」も使われているが、全体的に被動文の表現より「느끼다/感じる」「생각하다/思う」の能動文の表現の使用頻度が高い傾向が見られる。なお、以上のように、韓国語の能動文と対応する日本語の「言われる」「問われる」「思われる」「感じられる」のような、意思・思考・言語伝達に関わる述語動詞による受身文は、総文数 213 文のうち、全体の約 31%を占める 66 文で、非常に高い使用頻度を示した。この点は、日本語の受身文が韓国語の能動文と対応する典型的な特徴の一つであると言える。

4.2 JK 両言語の視点の置き方、解釈の焦点の差異が見られる場合

I K 被動文の成立に制約がある場合

- (4) (私は) (田辺に) 別に 好かれて んでもないしね。
「キッチン」
(다나베가) 딱히 날 좋아하는 것도 아니고.
「키친」
- (5) (私は) 「石村さんじゃない」と女の人に 声をかけ られました。「妻よ、安らかに」
(나에게) [이시무라 씨 아니예요?] 하고 한 여자가 말을 걸었습니다. 「아내여, 안녕히」
- (6) (私は) 奥さんに見られてもいいような手紙なんか書かないわ。「雪国」
(나는) 부인이 봐도 될 그런 편지 따윈 안 써요. 「설국」

上の例文で、「好かれる」「かけられる」「見られる」は韓国語に訳される場合、何らかの理由で主体が切り替わって、それぞれ「好く」「かける」「見る」の本動詞で表現されている。それは韓国語では固有語動詞の被動文の成立に制約が多いためである。仮に「かけられる」「見られる」に対応して接尾辞による「걸리다」「보이다」形になっても、i 類被動文の語彙的な性質のため、「걸리다」[보이다]は被動の意味を表わすのではなく、自動詞⁵⁾として自発や可能の意味を表す。また、「好かれる」に対応する ii 類被動文による「좋아지다」のような形態は自然な表現ではないため、韓国語では「好く」「かける」「見る」のような能動的な表現が用いられる。以上の分析から日本語では一部の動詞を除いてほとんどの場合受身文が成立するのに対し、韓国語では固有語動詞の被動文の成立に制約が多いため、能動的な表現が使われやすいと言える。

前述のように韓国語における被動文への転換の語彙的な制約のため、日本語の受身文に対応しない傾向があるとは言え、意味拡大と意識を通じての受動的な表現も可能である。例えば「好かれる」「かけられる」「見られる」の代わりに、「好奇心になる/호기심이 되다」「要請される/요청받다」「発覚される/발각되다」を用いて日本語の受身文に近い受動的な表現が可能である。

ところが、実際の訳文では日本語のような受動的な表現を避けて、動作主中心の能動的な表現で対応することは、単なる韓国語の動詞における被動文の成立の制約だけではなく、表現上の視点の置き方及びある出来事に対する解釈の焦点の違いによる理由

も考えられる。

(4)の文は主語である「私」に視点を置きながら「私」が「好かれていない」という結果の状態を表わすのに対して、韓国語では動作主である「田辺」に視点を置いて、状態より動作性を重視しながら表現する違いが見られる。(5)(6)も視点を主語である「私」に置いて、「私」が「女」「奥さん」が行う「声をかける」「見る」の動作の影響を受けるという意味合いが含まれているが、韓国語の場合は日本語とは異なって、動作を行う「女」「奥さん」に焦点を当てて「声をかける」「見る」という行為に重点が置かれている。

言い換えれば、同一の事態に対して韓国語は日本語と比べると、動作主中心の能動表現が受動表現よりもっと自然であることが分かった。これは、受動的表現における語彙的制約があるとは言え、日本語の小説を韓国語に訳す場合、意識と意味拡大による受動的な表現への転換も可能であるにも関わらず、そうなっている。このような傾向は、ある出来事の事態を把握し叙述するに当たって、日本語は動作主役割を重視し、動作主による結果・状態に関して表現するが、韓国語では動作主による結果・状態より動作主の動作それ自体に焦点を置いて表現しているという、両言語の視点の違いを見せている。

II. K 被動文の成立に制約がない場合

(7) (えりこさんは) 気の狂った男につけまわされ、殺されたのだ。 「キッチン」

미친 남자가 (에리코 씨를) 쫓아다니다가
급기야 살해한 것이다. 「키친」

(8) どの家も増築されたり部分的に補修されたりはしていたが。「ノルウェイの森」

어느 집이나 거의가 증축을 했거나
부분적으로 보수를 하긴 했지만.
「상실의 시대」

(9) 僕が言ったことがやっと彼女の耳に届き、時間をかけて理解される。 「ノルウェイの森」

내가 한 말이 마침내 그녀의 귀에
들어가고, 시간을 들여 이해시킨다.
「상실의 시대」

例文(7)(8)は能動文に訳され、(9)は能動文ではなく、使役文に訳されている。(7)(8)(9)の受身文に対して、いずれも韓国語の被動文は存在し、その表現は自然的であるにも関わらず、「つけまわす」「殺す」「増築する」「補修する」の影響を受ける側である「えりこ」「どの家」を主語として成立した日本語の受身文に対して、韓国語の場合は「つけまわす」「殺す」「増築する」「補修する」の動作主を中心とした能動文で対応している。さらに(9)では、日本語の受動動詞「理解される」に対して、対照的に「理解させる」という使役動詞まで用いて動作主である「僕」を取り立てて、「彼女」に対しての働きかけ性を強調しているが、韓

国語の動作主中心の特徴を明らかに物語っているとと言える。

このような現象は、両言語における表現構造の差異に起因するものと考えられるが、つまりある出来事を表現する際、日本語では動作主が表す動作の結果状態のプロセスの中で、動作の影響関係に焦点を当てて、動作を被る側に視点を置いて表現するのに対して、韓国語では動作結果の影響関係を重視せず、動作を行う動作主自体に視点を置いて表現しているという違いを見せている。

4.3 Jの使役受身文の場合

(10) (私は) 共通生活においてはある程度の我慢は必要だと言い聞かされていたからだ。

「ノルウェイの森」

(나는) 공동 생활에 있어서 는 어느 정도의 인내가 필요하다는 말을 들었기 때문이다.
「상실의 시대」

(11) 気が付いた時、私は病院のベットに寝かされて いました。「妻よ、安らかに」

정신이 들었을 때 나는 병원 침대에 누워
있었습니다. 「아내여, 안녕히」

(10)(11)の日本語の使役受身文に対して、韓国語は「聞く」「寝る」という能動動詞が使われる能動文に訳されている。(10)(11)において日本語では主語である「私」は事実上の動作主でありながら、それは自分の自発的な意志は排除され、使役主の動作または働きかけを受けての行為であるとの意味合いが含まれているため、被動作主でもあると読み取れるが、それに対して韓国語では日本語と同一の主体を主語として取りながら、全く「私」が自発的な意志で動作を行うという表現になる。(10)(11)において韓国語では「듣게 되다/聞くようになる」「누워 있게 되다/寝るようになる」を用いて日本語の使役受動表現に近い受動的表現が可能であるにも関わらず、敢えて「聞く」「寝る」という能動的表現が用いられている。つまり、ある事態を表現する際、韓国語では日本語のように視点を動作を受ける側に置いて、外部の要因や強要によって動作が行われたという受動的な表現は好まれていない。言い換えれば、日本語はある出来事に関して叙述する時、積極的に動作主を取り立てるよりその動作の引き起こした過程または結果に注目する傾向があるのに対して、韓国語では積極的に動作主を取り立てて動作主による動作が成立したというその出来事に関して客観的に反映する傾向があると言える。

4.4 Kにおいて、受動の意味を持っている他動詞で対応する場合

本稿で「受動の意味を持っている他動詞」とは、主語が動作主の行為・影響を受ける意味合いを含む他動詞を指す。

- (12) 私が今少し疲れてるだけ。雨に打たれた猿のように疲れているの。「ノルウェイの森」
지금 난 좀 지쳐 있을 뿐이에요. 비 맞은 원숭이처럼 지쳤거든요. 「상실의 시대」
- (13) 信子だったんです。顔に殴られたあとがあり、「妻よ、安らかに」
그 여성이 노부코였던 것입니다. 얼굴에 맞은 자국이 있고, 「아내여, 편안히」
- (14) 学食で女の子にひっぱたかれたりしそうじゃない? 「キッチン」
학교 식당에서 여자한테 뺨따귀 후려맞을 것 같지 않나? 「키친」
- (15) 日本踊の若手からも誘いかけられた時に、彼はふいと西洋舞踊に鞍替えしてしまった。「雪国」
일본춤의 젊은 축들로부터 막상 권유를 받게 되었을때 그는 갑자기 서양무용으로 전신하고 말았다. 「설국」

これらの例文をみると、日本語では受身文で表現されているが、韓国語では受動の意味をもつ他動詞の能動文で表現されている。(12)(13)(14)を見ると韓国語の他動詞「맞다/majda」という本動詞或いは複合動詞で表わされているが、韓国語では「치다/chida/ 打つ」「때리다/ttaelida/ 殴る」「후려치다/hulyeochida/ ひっぱたく」「피다/kkoeda/ 誘いかける」の被動形は存在せず、「맞다/majda/ 打たれる、殴られる」「후려맞다/hulyeomajda/ ひっぱたかれる」「권유를 받다/gwonyuyeulbatda/ 誘いかけられる」意味を表す他動詞の能動動詞が用いられる。一方、(15)では、日本語の「受ける」の意味を表す「받다」が使われて「권유를 받다/gwonyuyeulbatda/ 誘いかけられる」となっているが、意味的には受動の意味合いを持っているが、統語的・形態的な面においては韓国語の被動文として認めることができない。以上の例文の中で、「치다/chida/ 打つ」「때리다/ttaelida/ 殴る」「후려치다/hulyeochida/ ひっぱたく」「피다/kkoeda/ 誘いかける」は、何れも韓国語の被動文における三つの形態が共に成立しない他動詞である。この場合、韓国語では受動の意味を持っている他動詞を用いて能動文で対応している。以上のように、日本語の受身文に対して、受動の意味をもつ他動詞の能動文で対応する文は、総文数213文の中で44文もあって、全体の21%を占めている。

4.5 Kにおいて、授受動詞「～てくれる」と対応する場合

- (16) 私は誰にも教えられなくてもずいぶん早く感じ取った。「キッチン」
나는 누가 가르쳐주지 않았는데도 일찌감치 깨닫고 말았다. 「키친」
- (17) 僕は奇妙な非現実的な月の光に照らされた道を

辿って雑木林の中に入り、「ノルウェイの森」
나는 묘하도록 비 현실적인 달빛이 밝혀주는 길을 따라서 잡목숲으로 접어들어, 「상실의 시대」

- (18) 僕とレイコさんは街灯に照らされた道をゆっくり歩いて、「ノルウェイの森」
레이코 여사와 나는 가로등이 밝혀주는 길을 천천히 걸어, 「상실의 시대」

(16)(17)(18)の受身文に対して、韓国語では「教えてくれる」「照らしてくれる」という授受表現に訳されている。(16)(17)(18)の中で、動作の受け手である「私」[僕]に焦点を置いて表現する受身文に対して、韓国語ではいずれも動作の与え手である「誰」「光」「街灯」に焦点を置いて表現する能動文で対応し動作の方向性が表わされている。このような現象に関しては、韓国語にはない「～てもらう」授受動詞が日本語には存在するという事実からも理解できる。つまりある出来事を表現する際、日本語の「～てもらう」場合は、動作を受ける側に視点を置いて表現するのに対して、「～てくれる」の場合は動作を行う側に視点を置いて表現する。このように日本語の受身文に対して韓国語は授受動詞「～てくれる」で対応する現象は非常に対照的で、両言語における表現構造上の違いを見せている。

4.6 主語一致性のための受身文の場合、Kにおいて二重主語構文で対応する。

- (19) 葉子はそれと向かい合って、(おかみさんに)何か言われる度にははっきりうなずいていた。「雪国」
요코는 그와 마주 앉아 아주머니가 무슨 말을 할 때마다 분명하게 고개를 끄덕이고 있었다. 「설국」
- (20) それはちょうど(私が)直子にじっと目をのぞきこまれているときに感じるのと同じ種類の悲しみだった。「ノルウェイの森」
그것은 마치 나오코가 말끄러미 나의 눈을 드러다보았을 때 느낀 것과 같은 서글픔이었다. 「상실의 시대」
- (21) (先生に)名前を呼ばれても僕が黙っていると教室の中に居心地がわるい空気が流れた。「ノルウェイの森」
(선생님이) 이름을 부르는데도 내가 잠자코 있으니 강의를 안에는 어색하고 불편한 공기가 감돌았다. 「상실의 시대」
- 上の例文を見ると、日本語は主語「葉子」「私」「僕」に視点を置きながら動作主「おかみさん」「直子」「先生」が行った行為による結果・状態に注目している受身文になっている。一方、韓国語は本来なら動作主であるべきものが、従属節文の主語「아주머니」

「나오코」「선생님」として現われ、主節文の主語に直接的な影響を与えていることを表わしている。

したがって、この場合韓国語では他動詞の能動動詞が用いられた能動文となっている。一方、韓国語では二重主語が用いられているが、受身文の動作主が有情物であるとき多く用いられており、文型を見ると[S₁は(S₂が～V)]という構文形式になっている。ここでS₁は主節文の主語で、日本語の受身文の主語を指しており、S₂は従属節文の主語で、日本語の受身文の動作主を指しており、Vは能動動詞を指している。以上の両言語における表現上の違いから分かるように、日本語では主節文の主語と従属節文の主語とを一致させるため、受身文で表現しており、いかなる出来

事が起こっても主語に視点を置いて動作の影響を受けるという立場を固持しようとする傾向があることを表わすのに対し、韓国語は日本語と異なり主節文と従属節文における主語の一致性、つまり視点の一致性が求められなく、一つの文章の中に異なる主語を立てて、出来事の流れにおいてありのままに表現するため、主節文の主語以外にもう一つの主語まで立てて能動文で表現している。このように、日本語の視点の一致のため受身文が用いられている場合、韓国語では二重主語を用いる能動文で対応する例文は32文もあって、全体の15%を占めている。この現象は両言語における表現体系がかなり異なっていることを物語っている。

5. まとめ

本稿では日本語の文学作品を対象とし、日本語の受身文が韓国語の能動文に訳される場合、その対応状況、使い方の特徴を中心として分析を行ってきた。分析の結果をまとめると、次のようになる。

(1)受身文における述語動詞の性質別の対応頻度をみると、他動詞の受身文が自動詞の受身文より圧倒的に高く、他動詞の受身文の場合38.5%の割合で韓国語の能動文と対応し、自動詞の受身文の場合は100%が韓国語の能動文と対応する。受身文の構文別の使用率をみると、直接受身文より間接受身文のとき、韓国語の能動文と対応する頻度が高く、直接受身文の中では有情受身文の場合韓国語の能動文と対応する割合が高い傾向を示している。

(2)次に、「言われる」「問われる」「思われる」のような意志・思考・言語伝達に関わる述語動詞による受身文や使役受身文を含めて、日本語は動作を受ける主語に視点を置いて、動作主による結果・状態に注目する表現上の特徴があるので、複文においても主節

文の主語と従属節文の主語とを一致させるため、受身文が用いられていることが分かった。

一方、韓国語は被動文が成立するのにも拘わらず、被動文で対応せず能動文で対応する傾向が見られる。つまり韓国語の場合、受動的意味を持つ他動詞を用いたり、授受動詞「～てくれる」を用いたり、或いは複文における二重主語構文を用いる能動文で対応する理由は、単なる韓国語における被動文の成立の制約だけではなく、日本語と比べて動作を行う側に視点を置いて、動作主による動作が成立したというその出来事を客観的に表現するような、視点の置き方及び解釈の焦点の違いによるものと言える。

以上から日本語教育現場で日本語の受身文を教える際、日韓両言語の対応関係及び具体的な文型を取り上げて指導すればより効果的であろうと思う。今後は両言語の受身文の対応関係に関するデータをさらに充実させ、分析を精緻なものにすることを課題にしていきたい。

注

¹⁾「被動」は韓国語の受動の意味を表わすもので、「被動文」という用語は、韓国語における受身文を指すものである。本稿では日本語と韓国語の受身文とをともに指す場合は、「両言語の受身文」と呼ぶことにする。

²⁾韓国語の被動文において、三つの形態を共に被動文として認める学者と、接尾辞による被動文の形態のみを被動文として認める学者に分けている。本稿で

は三つの形態を共に認めて考察の対象とする。

³⁾寺村(1982)、仁田(1991)、鈴木(1977)を参照。

⁴⁾裴禧任(1988)、任洪彬(1978)参照。

⁵⁾韓国語における接尾辞「이(i)、히(hi)、리(ri)、기(ki)」は、被動の場合だけではなく使動の場合、自動詞の場合も使われるために、場合によっては文脈の構造、文脈との関わりによって判断するしかないという問題点も存在する。

【参考文献】

生越直樹(1982)「日本語漢語動詞における能動と受動——朝鮮語 hada との対照」『日本語教育』第48号

李文子(1979)「朝鮮語の受身と日本語の受身(その一)」『朝鮮学報』第91号 朝鮮学会

尹鎬淑(1998)「日韓両語における受身表現の視点の変遷——小説を中心として」『広島大学教育学部紀要』第47号

梅田博之(1982)「韓国語と日本語—対照研究の問題点」『日本語教育』第48号

鈴木康之(1977)『日本語文法の基礎』三省堂

塚本秀樹・鄭相哲(1993)「韓国人における固有語動詞の受身について—「이」形と「지다」形の使い分けを中心に」『月刊言語』第22号

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

仁田義雄(1991)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版

裴禧任(1988)『国語被動研究』成東文化社

任洪彬(1978)『国語被動化의 意味』震檀学報

【例文出典】

①「雪国」 川端康成(作) 新潮文庫
(1947/7出版)

「설국」 서기원(訳) 문예출판사
(1977/12出版)

②「キッチン」 吉本ばなな(作) 角川文庫
(1998/6出版)

「키친」 김난주(訳) 민음사
(1999/出版)

③「ノルウェイの森」 村上春樹(作) 講談社文庫
(1991/出版)

「상실의 시대」 유유정(訳) 문학사상사
(1989/6出版)

④「妻よ、安らかに」 高木杉光(作) 多楽園出版部
(2002/出版)

「아내여 편안히」 多楽園出版部(訳) 多楽園出版部
(2002/出版)